

論文

ヒュームにおける想像力の論理

— 抽象観念について —

平 川 己津子*

はじめに

デイヴィッド・ヒューム（1711–1776）は英国経験論の完成者であるばかりでなく、その名著『人間本性論』（1739–1740）においてすでにデカルト（1596–1650）に始まる近代における西洋哲学の一つの総決算を示したといえる。その哲学はJ・ロック（1632–1704）、マルブランシュ（1638–1715）、バークリ（1685–1753）等の先人からの思想を継承しつつ、経験論をロックやバークリが考えもしない方法で徹底した。キリスト教神学に頼らず、また合理論を批判したヒュームは、想像力が経験の形成に重要な役割を担っていることを言及し、『人間本性論』において、先人の想像を超えたそれまでの方法にない新しい視点から経験を論じている。ヒューム哲学において想像力は重要な役割を占めていることは、周知のとおりである。

想像力は数多の哲学者によって論じられた。古くは古代ギリシャの哲人の時代にまで遡って認めることができる。紀元前5世紀にプラトンは『国家』において「イデアの似姿」⁽¹⁾として、またアリストテレスはラテン語でいうところのファンタシアやファンタズムなどの言葉⁽²⁾に

よって、想像力の役割を積極的に説いている。

だが、近代に入ると想像力は消極的に論じられる。パスカル（1623–1662）は想像力を常に理性に屈するものとし、誤りと偽りの主とし⁽³⁾、デカルトは精神にとって想像力は必須ではない⁽⁴⁾と裁断した。しかしそのような否定的視点から反転し、ヒュームは、想像力を印象と観念を結合し分離する力である人間本性の能力として肯定的に検討した。想像力に能動的、受動的の両方の能力が含まれる⁽⁵⁾としたマルブランシュによる『真理の探究』からの影響も少なくない。ヒュームは近代において、想像力の構想する能力を論及した哲学者といえる。

日本では、三木清（1897–1946）を通してヒュームの想像力を論じた研究者は少なく、また三木がヒュームの想像力を論じていることはあまり知られていない。三木による『構想力の論理』は1937年から7年間21回にわたり雑誌『思想』に連載発表されたものを構成した著書である。想像力を構想する力として論じた、三木の代表作の一つであり、これまで様々な視点で取り上げられ、語られてきた。特にカント（1724–1804）やハイデガー（1888–1976）について書かれた箇所に関しては多くの研究者によって論

* 早稲田大学大学院社会科学部 博士後期課程4年（指導教員 古賀勝次郎）

じられている。しかし同書におけるヒュームの想像力について書かれた部分への言及は過去に見られない。三木はヒュームの経験論において、「構想力は中心的位置を占めている。」[三木 1948: 318] として、ヒュームの思想における想像力の重要性を認めている。

本論は三木の『構想力の論理』におけるヒューム論を手掛かりとして、ヒュームにおける想像力の論理を明らかにしていくことを目的とする。それにより、三木によるヒューム論から見出されるヒュームの確立した哲学の独自性の一端を見出す。尚、ヒュームの想像力と三木の構想力は同一のものとするが、最終章で説明するように、語の統一はせずに論じる。

については三木の『構想力の論理』第四章の「経験」において論じられているヒュームの経験論に焦点を当て、そこでどのようにヒュームの想像力が三木によって論究されたかについて検討する。その際、三木が注目した抽象観念と因果論のうち、本論では特に抽象観念をとりあげ、ヒュームにおいてどのように論じられているのかを解明する。さらに三木が批判的に指摘している、ヒュームの原子論的視点が如何にその哲学に働いているのかをみていく。最後に想像力と構想力の差異を見直して、ヒュームの論じている想像力が三木においてどのように論じられているかを明らかにする。本論によってヒュームにおける独自の想像力の論理の一端を解明する。

1. 経験

ヒュームにおける経験の哲学は「彼の功績であり、哲学の歴史における彼の地位を示している」[三木 1948: 295] と、三木がいうように、

それまでの近代の哲学者における経験に解決を求める姿勢から反転し、批判的姿勢から論じられている。理性に解決を求めず、理性を批判し、キリスト教神学にも解決を求めないヒュームによる経験論は、新しい視点からによるものだけでなく、それまでのイギリス経験論の影響もみることができる。理性に基づく合理的人間学と根本を異にする経験に基づいた人間学の創始はロックとされる。「経験論的人間学は、ロックがその哲学主著『人間知性論』(*An Essay concerning Human Understanding*, 1689) において、一切の知識は“経験”(experience) に由来すると宣言した時始まる」[古賀 1994: 18] とされ、ロックの宣言は同時にデカルトに遡る人間の“理性”(reason) に一切の窮極を求める合理的人間学をも批判することとなる。それはヒュームにおいても継承され、ロック、パークリ、マンドヴィル(1670-1733)などの思想を発展させ、独自の経験論を確立した。

さらにヒュームはロックとの間にもキリスト教神学においての思想に隔たりを持つ。ロックは人間の経験から人間の世界を論じるだけでなく、神の世界からも考察した。しかしヒュームはキリスト教神学の影響を受けた経験論を批判し、人間の経験のみから考察している。ヒュームの経験論の基盤にはキリスト教神学への批判があり、その上で合理主義とそれまでの経験論に対する批判が成立している。理性とキリスト教神学を批判することによって、想像力が人間の持つ知覚の可能性を裏打ちする力としてヒュームは経験論を論じた。

われわれの注意を、できる限りわれわれの外に向けてみよう。われわれの想像力を、天空に、あるいは宇宙の果てに、駆り立ててみよう。それで

も、われわれは、実際はわれわれ自身から一歩も出ていないのであり、この狭い範囲に現れたことのある知覚以外には、いかなる種類の存在者を思いうかべることもできないのである。これが想像力の宇宙であり、われわれは、そこに生じる観念のほかには、いかなる観念ももっていないのである。(T 1.2.6.8)

自らの想像力の宇宙において人は知覚し、経験が可能になるとヒュームはいう。自らの知覚の範囲の内で経験は成立する。知覚を超えた世界を人は経験することはできない。ヒュームは個別と特殊の差異による観念が、想像力の内につくられた習慣によって生起するとして、神の観念に頼らずに経験論を論じる。

三木はヒュームが『人間本性論』第一巻で抽象観念についての箇所において「自然界にあるすべてのものが個別的なものであること」(T 1.1.7.6)として論じている箇所を参照し、ヒュームの経験論は、まず如何にして個別的に存在する自然界のなかで、一般観念は存在するかということ、そして次に如何にして個々の感覚や観念は一つの関係に統合されるかという二点を重要な問題として検討した。つまりヒュームの経験を抽象観念と因果の問題として『構想力の論理』において論じた。次章ではそのヒュームの抽象観念をみていく。

2. 抽象観念

2-1 個別と一般

観念を抽象するという「不思議な能力」(T 1.1.7.15)は、古代ギリシャから中世、そして近代にわたって様々な哲学者が論じてきた。イギリス経験論者における抽象観念の議論は、ロックによって、観念が一般的となり、同伴する観念から切り離されることを抽象と呼び、さ

らにその性質によって普遍はつくられる⁽⁶⁾とされた。しかしパークリはこのロックによる抽象観念、さらには普遍論に反論する。

ヒュームは『人間本性論』で述べているように、パークリの主張を貴重な発見として、彼自身の方法で発展させる。ヒュームが注目したのは「すべての一般観念は、特定の名辞に結びつけられた個別的観念 (particular ideas) にほかならず、この名辞が個別的観念により広範な意味を与え、必要に応じて個別的観念をしてそれに類似した他の個別者 (individuals 個別的観念) を呼び起こさせる」(T 1.1.7.1)というパークリの言葉であった。さらに「一つの観念は、それ自身を考えると特殊であるが、同じ種類の他のすべての観念を表示するように、換言すれば表すようにさせられるので、一般的になる。」(原文まま) [Berkeley 1958: 26] としてパークリは抽象観念を説明した。さらに「普遍性 (universality) は、或る事物の絶対的積極的な本性ないし想念に存しなくて、或る事物がその標示ないし表示する特殊な事物に対して有する関係に存する」[Berkeley 1958: 29] として、ロックが説いた、一切の同伴観念から切り離されて心に現れるとした抽象観念、そして普遍論に反論した。

ヒュームはこのパークリによるロックへの反論を継承して、観念は区別や相違だけでなく、想像力によって結びつくことで精神に思念されるのであり、一定の度合いのない抽象観念を思念することは不可能であるとする。さらに、「自然界にあるすべてのものが個別的 (individual) なものであること (それゆえ、確定した度合いの量と性質を有すること)、(中略) それは哲学において一般に認められている原理である」(T 1.1.7.6) として、すべての観念には一定の

性質や量がそなわっており、抽象観念がいかにその抽象性が高くとも、一定の度合いの性質、量をそなえていると主張した。

ヒュームにおいて抽象観念は、観念それだけの論述にとどまらず、更に精神における働きの論究へと進む。つまりヒュームの抽象観念の問題は、想像力と「密接な関係」[三木 1948: 283]におかれる。精神の働きの中に生じる習慣が抽象観念と深く結びついていることを次節で論じる。

2-2 習慣

ヒュームは抽象観念を二点に分け論じている。第一に量、あるいは性質の度合いの正確な観念を形成せずにある量や性質を思念することは不可能であること、第二に、精神の能力は量や性質の度合いを、少なくとも思考と会話のすべての目的に十分に適する仕方で瞬時に考えることができるとする。

バークリによって論じられた、抽象観念であつても一定の度合いがあり、度合いが無い場合、抽象観念は知覚できないという説から、更に進め、ヒュームは精神の働きについて論じた。それによれば、「精神の能力は無限ではないが、それでもわれわれは、量と性質のすべての可能な度合いを、不完全な仕方ではあつても、少なくとも反省（思考）と会話のすべての目的に十分間に合う仕方で、一度に考えることができるのを、示すことである」(T 1.1.7.2)として、精神が場に応じた対応を示すことを説いた。三木はこのヒュームによる2点目の抽象観念と精神の能力に関する説を以下の5点で段階的に説明する。

1, 類似の知覚によって反復された経験は、

構想力のうちに習慣を作り、この習慣によって、類似の知覚の生起が、過去の複合観念を呼び起す傾向を有している。

2, 諸知覚が一定の点において類似しているのを見出すとき、他の点における明白な差異にも拘らず、我々はそれらに同一の名称を適用する。

3, 一定の点において性質的に類似する知覚に対して同一の名称を反復して使用する結果、他の連合、即ちこのように使用された抽象的な名辞と、命名された知覚のイメージが、構想力における習慣との間に、連合を生じさせる。

4, この種の習慣が得られた後は、その名称を聞くだけで、対象のうちの一つの観念を甦らせて、構想力によってすべての特殊な事情や割合と一緒に思念させる。このような第二の習慣の結果として、その名称を聞くだけで第一の習慣が働き、知覚の一定の性質のイメージを作らせるのに足りることとなる。

5, 同じ語は呼び起された観念とは異なる知覚にも適用されてきたが、しかし、その語はこれらの個物すべての観念を呼び起すことはできない。そこでその語は、単に心に触れて、それらのものを通覧することによって獲得した習慣を甦らせる。[三木 1948: 282]

つまり、抽象観念とは、現実に見前しているのではなく、可能的にのみ現前しており、その観念のすべてを想像力のうちに引き出すのではなく、その時々意図、目的、必要に応じてその観念を「注視できるように身構える」(T 1.1.7.7)のである。そのような必要に応じた観念の度合いを持たなければ、どれほど純度の高い抽象であつても、度合いの無い観念を心に思い描くことは不可能である。

例えば、「三角形」という語を述べたときに、それに対応する等辺三角形の観念を思い描き、「三角形の三つの角はたがいに等しい」と主張したときに、最初に無視をした他の直角三角形や二等辺三角形などの個別観念が浮かび、この命題が最初の観念には真であっても、一般的には偽であることがわれわれには看取される。

つまり、抽象観念とはいえそれ自身においては個別的であり、その代表において一般的になりえるのは、前述の三木によって示された5段階において説明された、経験による段階によって成立する習慣によるのである。三角形の個別的観念の種類を多く知識として得る経験を持てば持つほど、「三角形」の抽象観念の純度は高まる。純度の高い抽象観念を引き出す習慣には、一定の度合いの観念が必要となる。このような抽象観念の原理をヒュームは以下に述べている。

われわれが一般名辞を用いるとき、常に個物の観念を形成するということが、しかし、われわれはめったにあるいはけっしてこれらの個物のすべてを尽くすことができないということ、そして、残りの個物は、そのときの事情が必要とするならばいつでもわれわれをしてそれらと呼び起させるところの、習慣habitによって、代表されているだけであるということである。それゆえ、これが抽象観念および一般名辞の本性である。(T 1.1.7.10)

三木は「ヒュームの抽象観念の説が構想力と密接な関係にある」[三木 1948: 287]として、ヒュームの論じる想像力に着目する。ヒュームは想像力、即ち「心の言わば魔術的な能力」(T 1.1.7.15)によって観念は寄せ集められているという。また、その能力は観念を寄せ集める為に、宇宙の端から端まで駆け巡る(T 1.1.7.15)という。

ここで注目される点は、ヒュームは普遍を論ぜずに抽象を論じている事である。ヒュームにとって普遍とは抽象や一般とは同意ではない。ヒュームにとって想像力とは「もっとも偉大な天才においてつねに最も完全であり、まさしく私たちが天才と称するものであるが、人間知性(悟性)の及ぶ限りの努力によっても説明しえないもの」(T 1.1.7.15)である。ヒュームが論じる想像力は、知性にではなく、想像力の構想する力によって知性を提示し得るのであり、さらに言えば、想像力によって抽象と普遍との混同は避けられている。

三木は観念連合におけるヒュームの論理を批判した当時の学派と同調し、習慣と観念連合におけるヒュームの論理を非難する。次節ではその観念連合における三木の批判から、ヒュームによる連合論理をみていく。

2-3 観念連合

三木は、ヒュームが習慣を観念連合として説いていると指摘し、本来は習慣原理が観念の連合を説明する[三木 1948: 284]として批判する。しかし本当にヒュームは観念連合によって習慣が成立していると説いているのだろうか。三木は前述のヒュームの抽象観念を段階的に説明している箇所、ヒュームにおける習慣とは構想力のうちに経験がつくるものである[三木 1948: 281]としている。ヒュームが習慣を観念連合として説くとする三木には、矛盾が生じていると指摘できる。三木は観念には連合する力がなく、習慣における連合する力によって観念連合が可能になるという。ヒュームにおける観念連合は、想像力によって可能になるのであり、決して観念に連合する力があると主張しているの

ではないことは明白である。

同じような批判は19世紀のフランス哲学者、F. ラヴェッソン（1813–1900）にみることができる。ラヴェッソンは1838年に博士号を取得することとなる学位論文『習慣論』において、習慣と観念を以下の様に述べている。

「心像や観念の中には、運動も、運動の原理も存しない。観念の連合が習慣を説明するのではない。習慣の法則、習慣の原理が、観念の連合を説明するのである。悟性や想像の能動性が次第にその中に没入していくこの傾性は、運動の中に展開された自然的自発性であって、この自発性が急流の如くに注意や意志やさらには意識全体をも巻き込み、しかも同時に、至る処に、知性の統一と個性とを、分散せる多様な生命にも似た独立な観念や心像の無際限の多様性の中に、まき散らすのである。」（句読点原文まま）[Ravaisson 1938: 69]

ラヴェッソンは想像力の能動性によって、自然的に習慣に傾き、観念の多様性に知性の統一が成立するという。つまり観念連合が習慣を作り出すのではなく、習慣によって観念は連合されるとする。さらにヒュームの認識論に対抗した「常識（コモンセンス）」を人間本性の基本構造としたD. スチュワート（1753–1828）を例にとり、ヒュームが、想像力が観念を連合する力を評して、「一種の引力の力（attraction）」（T 1.1.4.6）とした思想を批判する。つまり、ヒュームによる観念連合説を批判し、観念には統合する力はなく、習慣こそが観念を連合しているのだとする。

しかし、ヒュームは観念そのものに運動があると論じているのだろうか。ヒュームは観念に連合する原理を見出しているのではなく、観念は想像力によって連合するのだと説明している。

想像力によって、すべての単純観念がたがいに分離でき、また好むままの形態に再び統合できるので、想像力が何らかの普遍的な諸原理に導かれて、時と場所とにかかわらず或る程度一様不変な仕方働くのであれば、想像力の作用ほど説明できないものはなかったであろう。（T 1.1.4.1）

観念のうちに連合する力があるのか、想像力に連合する力があるとするのか、これまで述べたヒュームの論理においては、後者が優勢と考えられるだろう。観念連合についての議論は、ヒュームの思想を批判した、T. リード（1710–1796）を代表とするスコットランド常識学派とされる人々から、スコットランド哲学の信奉者である哲学の先生に学んだといわれるラヴェッソン（その後、ドイツ・ミュンヘンへ留学し、シェリング（1775–1854）の講義を受講している）、そしてベルグソン（1859–1941）へと継承されている。三木以前に既に様々な思想家によってヒュームの観念連合は批判されているが、それら思想家の観念連合の論理についてはここでは保留とし、別の機会に論じる。

三木はヒュームの観念連合と習慣の説に反論し、言語と概念を例に挙げて反証している。「特殊な観念と一般的な名辞とが先ず別々にあって、それらが習慣によって連合されるというのではなく、概念と言語とはもともと結びついている」[三木 1948: 284] として、既に個別の観念と一般の観念は連合されているのであり、習慣が連合するのではないという。同様に概念と言語は既に連合しており、習慣によるのではないというのが三木の論旨である。しかし、日常に使われる言語は、既に概念を伴われ、使用されているのだろうか。

厳密に言えば言語は表音、表記文字いずれの

言語でも、想像力が働くことで意味と概念が統合して意味判別ができるといえる。個別の文字そのものの一般化された概念を習慣的に保持している者の間では、意味が通じるが、同じ言語習慣を持たない場合、初見の文字の意味を理解することは不可能である。未知の言語に出会った時の私たちの反応を思い出せば、明白である。

同様に、言葉と概念が使用以前に既に組み合わさっていた場合、前述の「三角形」の議論が成立不可となる。「三角形」という語から人は様々な形の三角形を心に思い浮かべるであろう。等辺三角形を思い浮かべれば、その角は3つとも等しいが、「三角形」を一般的に考える為に、多種多様な三角形を思い浮かべた場合、三つの角が等しいとは限らず、それは二等辺三角形や直角三角形の場合もある。概念と言語の結びつきは個別的なものであるし、各々の経験、あるいは性格によっても多様化する。その結びつきには想像力の働きが必要であり、またそれらは常に結びついているものではない。ヒュームのいうように、その時々「目的に十分間に合うような仕方」(T 1.1.7.2)で示すことができるのである。

このような三木によるヒューム批判は抽象観念を論じる際に、観念連合についてだけでなく、印象あるいは知覚論においてもみられる。次節ではヒュームの印象論を如何に三木が批判しているのかみていく。

2-4 印象

ヒュームは知覚を印象と観念に分類する。観念は印象の摸像であり、印象は感覚と反省の印象に分けられる。感覚印象は外的世界のあり方

についての情報を与える知覚であり、反省の印象は精神のあり方についての情報が与えられる知覚である。ヒュームによって精神は「諸知覚の集まり」(T 1.4.6.4)にしかすぎないとされるが、その集合は想像力の結合する能力によって集まり、知覚を可能とする。

三木は印象論において、ヒュームの原子論的側面を批判している。ヒュームの印象はそれ自身において「完結的」[三木 1948: 285]であって、表現的ではなく、他の情緒、意欲、活動に対する何等の指示も含まないというのがヒュームの論じている印象であり、原子論の特徴の一つと三木は主張する。確かにヒュームによる「印象」にはそれ自身、何の指示も含まないが、前述にあるように想像力が働くことによって、観念へと模写される。当初の印象は感覚印象とされて、ヒュームによれば、精神よりも「解剖学」(T 1.1.2.1)に関わる分野とするところから、ヒュームの印象とは神経的感觉を指していると考えられる。三木が完結的として批判するヒュームの印象は、この神経に関わる感覚印象を指していると考えられる。

ベルグソンはイメージにおける記憶についてこう述べている。「物質世界のすべて、あるいは少なくともその本質的部分を、純粹知覚がわれわれに手渡してくれるのであるから、そしてまたそれ以外のものは記憶からやってきて物質に付加されるのだから、記憶とは、何よりもまず、物質からまったく独立した能力であると言わなければならない。」[Bergson 2011: 100] ベルグソンは記憶の問題を述べているのだが、つまりヒュームでいうところの「印象」とは、ここでのベルグソンの「純粹感覚」といえる。物質世界の知覚である印象は、想像力によって観

念へ変様し精神へと運ばれていく。

三木は「単純な印象の如きものが存在するのではなく、感覚もすでに知覚的、従って表現的であるといわねばならない」[三木 1948: 285]として、ヒュームの「印象」を否定するが、この際に三木が論じている感覚は、ヒュームにおいての観念であり、あるいは反省印象と考えることができる。ヒュームにおける感覚論では、想像力によって印象が観念となることで感覚も表現的表象的となりえるのである。三木が指摘するような「単純な印象」による感覚ではなく、印象と観念の結合によって生起する感覚が知覚として表現的となるとして、ヒュームは説明する。次節では、このようなヒュームの経験論から展開される感覚論を三木がどのように論じているか、みていく。

2-5 感覚論

ヒュームの経験論によって立脚する感覚論は、一つの抽象論であり、印象から観念というイメージを生成する想像力が働くことで、抽象観念は生起する。印象を再現する力は「記憶」(the memory)と「想像力」(the imagination) (T 1.1.3.1)であり、それらによって観念が生じる。観念は印象のイメージ、表象であり、思惟はイメージを基礎とする。

アリストテレスは『靈魂論』において、「思考能力的靈魂には表象像がいわば知覚像として存する。しかしそれがその表象像を善いものとして、あるいは悪いものとして肯定したり否定したりする時は、忌避したり追求したりする。それゆえ表象像なしには靈魂は決して思惟しない。」(431a) [Aristotle 1968: 105]と論じた。思惟には常に表象、イメージが結びついており、

ヒュームの経験論においては具体的思惟がつねに生に近く、経験つまり行為に近く立とうとしている。

三木はこれまでみてきたヒュームの経験論から感覚論へと発展させ、感覚と行動とを結び付け論じる。三木が指摘するようにデカルトは、感覚を行動への入り口とする。「感覚的知覚はただ人体の精神との結合にのみ属するものであって、なるほどこの結合にとって、外物がいかなる益を与えあるいは害を加え得るかを、通常我々に示しはするが、しかしその外物がそれ自体いかなるものとして存在しているかは、ただ時折かつ偶然的にしか教えないということである。」[Descartes 1964: 97]つまり、知覚は精神と結びつき、害益を私たちに知らせ、それによって私たちの精神あるいは身体は行為へと運ばれていく。感覚のうちに想像力が働き、感覚が「身体的行為的自己の末端」[三木 1948: 286]となる。三木は「感覚は或る知的な客観的なものの意味と共に或る感情的な主観的なものの意味を含んでいる」[三木 1948: 286]として、感覚は行動に対する刺激の地位を占めているとする。

デューイは、ヒュームと同様に感覚は情念 (passion) に属するという。「感覚に関する議論は、認識 (知識) という項 (under the head of knowledge) でなく、直接的な刺激と反応 (under the head of immediate stimulus and response) という項に属している」[Dewey 1920: 87]として、感覚は知性に属せず、情念に属しているとする。つまり、三木のいうところの身体的行為的自己の末端には、情念に属した感覚があり、行為は情念によって身体的自己として成立する。

感覚は知覚から一つの衝撃 impulse として変

化し、行動へとつながる。いわば行為へと働きかける衝撃が感覚である。受動から能動へと様態を変えていく観念が、経験論における抽象観念としての感覚である。そこには常に想像力が働いている。想像力によって受動的に受け取られた感覚は、能動的行為へと変化する。これがヒュームによって論じられた経験である。受動的能動としてのヒュームの経験論は、ジル・ドゥルーズ（1925–1995）によっても語られる⁽⁷⁾ところである。

本章ではこれまで三木によって論じられたヒュームの抽象観念を、観念、習慣、観念連合、印象と感覚論の5節に分け、みてきた。三木はヒュームが論じる想像力に新しい経験論を見出しているが、同時にヒュームの原子論的側面を批判する。これまで三木によって指摘された印象と観念連合を反証してきたが、次章では、ヒュームによる原子論をみていく。

3. 原子論

『構想力の論理』で三木は、経験論によって、思惟の具体的性格について、深い考察をすることで、悟性は感覚なしには何者でもないということが説かれた⁽⁸⁾としてイギリス経験論の哲学に永続的価値を見出している。しかし同時にアメリカのプログマティズムの視点から、イギリス経験論を批判し、ヒューム思想を排他的と指摘する。プログマティズムを代表するJ. デューイ（1859–1952）は「正統的見解において、経験は主に知識の事柄として留意されている。しかし古い眼鏡を通さずに見る眼にとって経験は、明らかに生命的存在と身体的（自然的）並びに社会的環境との交渉として現れる」[Dewey 1917: 7]として過去の経験論と差別化した、自

らが説く根本的経験論によって、イギリスの伝統的経験論への批判を展開し、更に伝統的経験論は、“主観性”に感染した精神的なものであるとした。本来、経験がそれ自身について指し示すものは、行為と苦しみの中に入りこみ、その反応によって変化を被る客観的世界であって、いわば、経験は意識の現象ではなく世界における出来事であり、人と環境の間における交渉によって成立し、主観的であるとともに客観的である。デューイは、伝統的経験論は、根本的経験論が説くような主客が統一したような状態の経験ではなく、主と客が分離した経験に陥っているという。原子論的視点によって、主観と客観の分離を許し、主客の統一を不可能にしているとする。

三木がその思想を継承するデューイは、伝統的経験論を特殊あるいは個別主義（particularism）として批判する。[Dewey 1917: 7]つまり生命的な経験（根本的経験論）は本来、実験的（experimental）、試行的であって、受動の変換であり、投影によって、また未知への到達によって、未来の気配との結合であるとする。経験は受動と能動の結合であり、未来への連なりである。デューイは、伝統的経験は諸結合（connections）と諸継続（continuities）にとって異質なものである⁽⁹⁾とする。

しかし、はたしてヒュームは三木が同調するデューイの指摘する伝統的経験論者として、該当するのだろうか。確かに時系列でみれば、デューイにとってヒュームは過去のイギリス経験論者といえる。しかしヒュームの論じる経験には結合や継続、連関が想像力と共に言及されている。上に参照した“*Creative intelligence*”におけるデューイの『哲学の復帰への要求』（The

need for a Recovery of Philosophy) 1章の伝統的経験を論じている箇所にはヒュームを名指した箇所は見当たらない。しかしその後続く2章には、ヒュームの経験論によって生じた感覚論は潜在的排他主義を顕在化したとしている。[Dewey 1917: 17] つまり、ヒュームの原子論的態度によって、経験論は主観と客観を個別的に分離し、さらには排他的様相をも露呈しているというのである。

このようにヒュームを原子論者として扱ったのはデューイと同様、プラグマティズムを代表するW. ジェイムズ (1842–1910) も同様である。ヒュームを「原子論の英雄」⁽¹¹⁾というジェイムズは主著『心理学の根本問題』(The Principles of Psychology) の18章における想像力の論究において、ヒューム論じる観念はすべて互いから区別され、そしてどのような結合の方法も持ちえなく、また想像力において観念は、観察によって現れたものでなく、先験的論理によって、完全に適当な模写であることを証明する」[James 1950: 45] と論じる。つまりジェイムズはヒュームの論じる観念は原子論的立場によって、分離、分割されていて、結合とは縁のないものであり、アプリオリなる論理によって模写が成立しているとする。これを三木は継承し、ヒュームの経験を排他的経験論⁽¹⁰⁾として批判している。

確かにヒュームの原子論的態度は『人間本性論』の第一巻、知性論に見ることができる。

有限な性質についてのわれわれの観念が、無限には分割できず、しかるべき区別と分離によってその観念を完全に単純で分割不可能なより小さい諸観念に帰着させることができると結論できる。精神の無限な能力を斥けることにおいて、われわ

れは、精神がその観念の分割において(有限回の後)終わりに達し得るものと想定しているのであり、この結論の明証性を逃れるいかなる可能な方法もないのである。(T 1.2.1.2)

人間の有限な能力によって分割可能な観念から分割不可能まで観念が帰着し、その結論をもってヒュームの観念による抽象の個別性は説明されている。この論理は、すべての物質は分割不可能な原子で構成されているとするエピクロスの論理⁽¹¹⁾に近似している。

さらに、三木が指摘しているヒュームによる傾向性についての論究も、エピクロスの影響⁽¹²⁾をみることができる。ヒュームが注目する想像力の「移行的衝動」transitive impulse [三木 1948: 315]あるいは衝動なしに進む傾向性によって、想像力は記憶と感覚の体系を超えて、反復された知覚の結果によって習慣は生じる。習慣は一つの傾向であり、想像力の傾きによる。

このような視点からヒュームの思想を原子論的とすることは可能かもしれない。原子論については、A. スミス (1723–1790) が1740年代末に書いたとされる『哲学論文集』において、当時、原子論が最ももてはやされた教説⁽¹³⁾としてしていることから、ヒュームも既定の体系として受け入れていた可能性は高い。

しかし原子論の是認が、同時に排他主義者として認められてしまうのであれば、スミスも同様に、原子論を復活させたガッサンディ (1592–1655) も同類とされる。ヒュームの思想は排他的とは程遠い、共感論によっても知られている。実際、「ヒュームの共感論は、ヒュームの道徳哲学・社会科学の出発点であり土台であり、骨格を成しているの」[古賀 1999: 56] あって、ヒュームの哲学には共感が主軸となっている。

共感 (sympathy) とはギリシア語源である sympateia からきており, sun = 共に, 似た, という意味と pathos = 感情, から成立している語であり, 他人の経験の影響から自己も同じような感情を持つという意味である。他人の苦悩に対する同類感情を我々が持つことを共感といい, 社会の中で人々がお互いに作用しあい, 調和をもたらす為, 必須の感情である。他者の心を慮るという点では, 主と客の統一という視点がなければ共感は論じえないだろう。ヒュームはそのような共感概念について論じた哲学者である。排他主義というようなレッテルを貼るのには, ほど遠い存在というべきである。

想像力による共感の生起は『人間本性論』の第二巻においてヒュームに論じられている。

われわれの感情は, 他のどんな印象よりも, われわれ自身に, そして精神の内的な働きに依存している。この理由で, 感情は, 想像力から, すなわち, それら感情についてわれわれが抱く生き生きとしたすべての観念から, 自然に生じる。これが共感の本性と原因である。われわれが他人の意見や感情に気づくとき, いつでもそれに深く入り込むようになるのは, この共感という仕方にしただけなのである。(T 2.1.11.7)

ヒュームは共感とは想像力によって生起するものであり, 人間の本性の一部であるとする。多様な社会が成立するのも想像力による人々の共感であり, さらに道徳の根拠ともなる。デューイやジェイムズが批判し, 更には三木がその一面を見て排斥すべきと説くヒュームの思想に, 排他的である根拠をみることは難しい。『人間本性論』第一巻のみを根拠としたヒューム像は, ヒュームの難解な思想の全体を表しているとは言いがたい。知性論だけで多面的なヒューム像を理解するのには不十分である。

4. 想像力と構想力

本論ではこれまで想像力と構想力の語における定義を, 明瞭に分けずに論じてきた。それは『構想力の論理』において三木がヒュームの「想像力」⁽¹⁴⁾を「構想力」として論じ, ヒュームの「想像力」を構想力と同一視している為, 本論では原文のままに統一せず論じてきた。しかし当然, 三木は想像力と構想力を同一視はしていない。想像力は三木にとって, 単に図解的な像を作り出す能力であり⁽¹⁵⁾心に思念されたものを直観的に例示する表象を表す能力にしかすぎない。構想力は想像力よりも根源的であり, 構想力の本質は「総合し統一すること, かくして形を作ること」[三木 1948: 276] とされる。「構想力の論理」(Logik der Einbildungskraft) という表現はパウムガルテン (1714–1762) が, 感性的認識学を美学として, 悟性的認識学を論理学とに分けて認識を位置づけた際, 使っている。しかし, そもそもドイツ語の Einbildungskraft は想像力を意味する語であり, 日本語訳において構想力として想像力と概念が区別されたのは, 1929年にカントの『純粹理性批判』を翻訳した天野貞祐 (1884–1980) の才覚が寄与している。

では, ヒュームの『人間本性論』における「想像力」はどのような定義で使われていたのだろうか。彼は imagination と fancy の二つの語によって想像力を論じている。ここでその一部を例としてみてみよう。

this quality (resembles) alone is to the fancy a sufficient bond and association.

この類似性という性質だけでも想像力 (fancy) にとって十分な絆であり連合力であることは, 明白である。(T 1.1.4.2)

the imagination must by long custom acquire the

same method of thinking and run along the parts of space and time in conceiving its objects.

想像力 (imagination) も、長い間の習慣によって同じ思考法を習得し、対象を思い浮かべるときに空間と時間の諸部分に沿って進むほかないことも、同様に明らかである。(T 1.1.4.2)

But on the other hand, if the consideration of these instances makes us take a resolution to reject all the trivial suggestions of the fancy, and adhere to the understanding, that is, to the general and more establish'd properties of the imagination; even this resolution, if steadily executed, wou'd be dangerous, and attended with the most fatal consequences.

しかし他方で、これらの事例の考察によってわれわれが、想像力 (fancy) の些細な示唆をすべて拒絶することを決心して、知性に、すなわち想像力 (imagination) の一般的でより確立された性質に付き従うことを決心するならば、この決心でさえ、もし一貫して実行されるならば危険であり、もっとも致命的な結果を伴うだろう。(T 1.4.7.7)

ここで論じられているのは、想像力による観念の結合についてであるが、ヒュームは imagination に結合や連合の能力があるのと同様に、fancy にもそのような能力を認めている。つまりヒュームは経験を語る際に、観念を連合する能力、あるいは受動的感覚を行為へと能動化させる能力を imagination と、fancy の両方において、統合し総合する「想像力」として論究している。三木はヒュームが論じるこのような「想像力」を構想力として『構想力の論理』において説いた。

ヒュームの「想像力」は、ドイツではバウムガルテンそしてカント (1724-1804) へと継承されて有名な三批判の著作へとつながるのだが、英国における想像力についての展開はどうだったのだろうか。経験論から分岐して19世紀へとつながる想像力の大きな流れはワーズワース (1770-1850)、コールリッジ (1772-1834)

などのロマン主義者たちに、想像力についての考察がみられる。特にコールリッジによって1817年にギリシャ語を基本として創作された“esemplastic”という語は、多様な要素を統合して新しい概念を作ることのできる「想像力」の特性を表す語として使われた。

一つのものに統合するという意味のギリシャ語から作った、私の造語なのです。新しい意味を伝えねばならない場合、新しく言葉を造れば、私が意味するところを思い起こすのに役立つのみならず、“imagination”という語の通常の意味と混同せずに済むと考えたのです。[Coleridge 1968: 107]

三木が指摘するように、コールリッジの esemplastic は「形の統一にもたらず力」[三木 1948: 276] とされる。経験において行為が形作られ、また経験は知識を意味する。コールリッジは想像力 (imagination) を第一次的と^{プライマリー}第二次的に^{セカンダリー}に区別し、第一次的想像力を人間の知覚における原動的な能力として、無限の「我在り」(I am) における永遠の創造行為を有限に反復するものとし、第二次的想像力を第一の反響とし、意識的な意志として、しかも第一と作用においては同一と考えた。さらに空想力 (fancy) を時間と空間の秩序から解放された記憶の様式とした。つまり、コールリッジは想像力における先験性と創造性、さらに fancy をヒュームのそれとは違い、日本語で意味するところの空想と同意のものとして分別した。近代における想像力への否定的視点は、ヒュームの『人間本性論』を転機として、肯定的視点へと変化し、さらに統一する力という概念を表す語を見出し、後世へと継承されている。

三木が「構想力の本質は総合し統一すること」[三木 1948: 276] とするように、経験における

想像力も単に過去との結合ではなく、未来との結合でもある。経験とは行為的なものであり、歴史とともに未来への投射があることで行為としての経験が成立する。

人間の行為は個人の次元のみならず、社会的な次元においても考察される。ヒュームが主著『人間本性論』において論じた「想像力」は、そのような社会現象を織りなす人間の行為を可能とし、その現象を客観的に見る態度を形成する。ヒュームは「想像力」によって経験を生成するだけでなく、さらに未来への投射も可能にしたといえる。

結 び

ヒュームの多面的哲学理論を単純な一つのレッテルでまとめることは困難である。ヒューム研究者の間でも懐疑論者あるいは自然主義等、様々な見解からヒュームは論じられている。三木の『構想力の論理』においても、ヒュームの『人間本性論』の第一巻である知性論に関してのみ三木が論じていることは明らかである。しかし『人間本性論』は第二巻の“情念論”と第三巻“道徳論”の計三巻で構成され、全巻において想像力の働きが論じられている。経験だけでなく共感や道徳における想像力の働きは、ヒュームにおいて人間の社会的活動において重要視されている。

ヒュームは想像力を論じる際に、常に連合、結合などの結ぶことを意味する能力を論じた。それは自ずと二元論あるいは二分法の否定へとつながる論理になることは明白である。ヒュームは想像力による経験、共感そして道徳と論じる中で、複数の心の働きを結び力を解明した。想像力を論述の柱にし、人間の知覚から始め、

社会との繋がりを論じることで、想像力の社会的科学的側面を見出すことに成功したといえる。本論では三木における経験論を通してヒュームの想像力の論理を検討してきた。特に抽象観念において、三木による批判も含めてヒュームの想像力の論理をみてきたが、ヒュームの経験論においては、因果論も重視される。ヒュームの多面的な哲学における想像力の論理の考察において、今後、因果論へと繋げていく。

[投稿受理日2017.4.22/掲載決定日2017.7.6]

略号一覧

T: *A Treatise of Human Nature: A Critical Edition*, 2 vols., David Fate Norton and Mary J. Norton (eds.) Oxford: Clarendon Press. 2007. 括弧内に巻、部、章、段落の順で番号を記す。

注

- (1) Plato. (1979) 訳 藤沢令夫 (Ed.) 『国家』 東京：岩波書店。
- (2) Aristotle. (1968) 訳 山本光雄、副島民雄 (Eds.) 『靈魂論』 東京：岩波書店。
- (3) Pascal, B. (1973) 訳 前田陽一、由木康 (Eds.) 『パンセ』 東京：中央公論社. p58 「想像力。これは人間のなかのあの欺く部分のことである。」
- (4) Descartes, R. (2001) 訳 野田又夫 (Ed.) 『方法序説：ほか』 東京：中央公論新社. p109 「なおまた私は、私のうちにある、この想像する力が、理解する力と異なるものであるかぎり、私自身の本質にとっては、すなわち、私の精神の本質にとっては、必要とされるものではないことをも認める。」
- (5) Malebranche, N. (1935) *Recherche de la vérité. Tom 1.* Paris: E. Flammarion. p152 (筆者拙訳)
- (6) Locke, J. (1972) 訳 大槻春彦 (Ed.) 『人間知性論』 東京：岩波書店. p228
- (7) Deleuze, G. (1988) *Empirisme et subjectivité: Essai sur la nature humaine selon Hume* (4e éd. ed.). Paris: Presses Universitaires de France.
- (8) 三木清. (1948) 『三木清著作集. |p 第8巻』 東京：岩波書店. p277
- (9) *Creative intelligence: Essays in the pragmatic attitude*

- (1917) In Dewey J. (Ed.) p7 (筆者拙訳)
- (10) 三木清. (1948). 『三木清著作集. |p 第8巻』 東京：岩波書店. p278
- (11) Epicurus. (1959) 訳 出隆, 岩崎允胤 (Eds.) 『エピクロス：教説と手紙』 東京：岩波書店. p198「エピクロスの哲学は原子論的唯物論と言われる。つまり、それ自身では不可分で不変化の原子が根本物質であり、それら無数の原子が無限の空虚のうちに運動していて、いっさいの事物は、それらの原子が合成してできたものである、と考える哲学である。」
- (12) Epicurus. (1959) 訳 出隆, 岩崎允胤 (Eds.) 『エピクロス：教説と手紙』 東京：岩波書店. p199「デモクリトスでは、いっさいの事物の運動は必然的であると考えられたが、これに反して、エピクロスでは、原子は、重さを因とする落下の途中、全く定まらない時と所で—その意味では偶然的に—わずかに方向が偏る、と主張された。」(傍点原文まま)
- (13) Smith, A. (1994) 訳 佐々木健 (Ed.), 『哲学・技術・想像力：「哲学論文集」』 東京：勁草書房. p150「このような教説は、レウキッポス、デモクリトス、およびエピクロスとともに古くからあるが、それは全世紀にガッサンディによって復活され、以来、ニュートンおよびその大多数の支持者によってとりいれられている。現在のところそれは、既定の体系、あるいは最ももてはやされ、ヨーロッパの大部分の哲学者によって最も是認されている体系とみなされてよい。」
- (14) 本節においてのみヒュームの想像力には、他の想像力と区別するため鍵括弧を使用。
- (15) 三木清. (1948) 『三木清著作集 第8巻』 東京：岩波書店. p40

参考文献

- Aristotle. (1968) 訳 山本光雄, 副島民雄 (Eds.), 『靈魂論』 東京：岩波書店.
- Bergson, H. (2011) 訳 竹内信夫 (Ed.), 『新訳ベルクソン全集』 東京：白水社.
- Berkeley, G. (1958) 訳 大槻春彦 (Ed.), 『人知原理論』 *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*. 東京：岩波書店.
- Coleridge, S. T. (1968) In Shawcross J. (Ed.), *Biographia literaria*. Oxford: Oxford University Press.
- Creative intelligence: Essays in the pragmatic attitude* (1917) In Dewey J. (Ed.), . New York: H. Holt and Company.
- Deleuze, G. (1988) *Empirisme et subjectivité: Essai sur la nature humaine selon Hume* (4e éd. ed.). Paris: Presses Universitaires de France.
- Deleuze, G. (2000) 訳 木田元, 財津理 (Eds.), 『経験論と主体性：ヒュームにおける人間的自然についての試論』 東京：河出書房新社.
- Descartes, R. (1964) 訳 桂寿一 (Ed.), 『哲学原理』 東京：岩波書店.
- Descartes, R. (2001) 訳 野田又夫 (Ed.), 『方法序説：ほか』 東京：中央公論新社.
- Dewey, J. (1920) *Reconstruction in philosophy*. New York: H. Holt and Company.
- Dewey, J. (1968) 訳 清水幾太郎, 清水礼子 (Eds.), 『哲学の改造』 東京：岩波書店.
- Epicurus. (1959) 訳 出隆, 岩崎允胤 (Eds.), 『エピクロス：教説と手紙』 東京：岩波書店.
- Hume, D. (1995) 訳 木曾好能 (Ed.), 『人間本性論』 *A Treatise of Human Nature*. 東京：法政大学出版局.
- Hume, D. (2011) 訳 石川徹, 中釜浩一, 伊勢俊彦 (Eds.), 『人間本性論』 *A Treatise of Human Nature*. 東京：法政大学出版局.
- Hume, D. (2012) 訳 伊勢俊彦, 石川徹, 中釜浩一 (Eds.), 『人間本性論』 *A Treatise of Human Nature*. 東京：法政大学出版局.
- Hume, D. (2007) In Norton D. F., Norton M. J. (Eds.), *A Treatise of Human Nature: A critical edition*. Oxford: Clarendon.
- James, W. (1912) In Perry R. B. (Ed.), *Essays in radical empiricism*. New York: Longmans, Green, and co.
- James, W. (1950) *The principles of psychology* (Authorized ed. ed.). New York: Dover.
- James, W. (1940) 訳 松浦孝作 (Ed.), 『心理學の根本問題』 東京：三笠書房.
- Malebranche, N. (1935) *Recherche de la vérité*. Paris: E. Flammarion.
- Malebranche, N. (1997) In Lennon T. M., Olscamp P. J. (Eds.), *The search after truth ; elucidations of the search after truth*. New York: Cambridge University Press.
- Pascal, B. (1973) 訳 前田陽一, 由木康 (Eds.), 『パンセ』 *Pensées*. 東京：中央公論社.
- Plato. (1979) 訳 藤沢令夫 (Ed.), 『国家』 *Plato's republic*. 東京：岩波書店.

- Ravaisson, F. (1938) 訳 野田又夫 (Ed.), 『習慣論』
De l'habitude. 東京：岩波書店.
- Smith, A. (1994) 訳 佐々木健 (Ed.), 『哲学・技術・
想像力：「哲学論文集」』 *Essays on philosophical subjects*.
東京：勁草書房.
- 古賀勝次郎. (1999) 「ヒュームの経験論的人間学の
研究 (19) - ヒュームの共感論 (1)」『早稲田社会
科学研究』 (59), 37-67.
- 古賀勝次郎. (1994) 『ヒューム体系の哲学的基礎』
東京：行人社.
- 三木清. (1948) 『三木清著作集. |p第8巻』 東京：
岩波書店.